

# 中学生の親の全体的自己価値と 具体的側面の自己評価の特徴

## Global self-worth and domain-specific self-evaluations among parents of junior high school students

山本 ちか  
Chika YAMAMOTO

本研究の目的は、中学生の親の全体的自己価値と具体的側面の自己評価の様相を検討することである。全体的自己価値は、どれだけ自分のことが好きか、満足しているかなど自分自身を肯定的あるいは否定的に評価する程度を示している。具体的側面の自己評価は、外見、運動、仕事の3側面から構成されている。中学生の親は、全体的自己価値と具体的側面の自己評価の得点が比較的高く、青年期と比較して肯定的に評価しているようである。父親と母親では、全体的自己価値と具体的側面の自己評価いずれも、父親の方が肯定的に評価するという性差がみられた。また全体的自己価値と、外見と仕事の側面の自己評価には有意な正の関連がみられた。

The purpose of this study was to examine the global self-worth and domain-specific self-evaluations among parents of junior high school students. Global self-worth was the degree to which the parent likes oneself as a person and is happy with oneself. Self-evaluations were assessed three distinct dimensions; appearance, athletic competence, and job competence. Results suggested that parents of the junior high students relatively had high score of the global self-worth. Parents were more positive for themselves than adolescents. There were gender differences in the global self-worth and domain-specific self-evaluations. Moreover the global self-worth was related to appearance and job competence.

キーワード：全体的自己価値，具体的側面の自己評価，中学生の親  
global self-worth, domain-specific self-evaluations, parents of junior high school students

### 【問題と目的】

全体的自己価値とは、自分自身についての評価的感情であり、例えば自分のことが好きであるのか、自分に満足しているかといった自分自身全体について肯定的に評価しているのか、それとも否定的に評価しているのかの程度を示すものである。

青年期には、こうした全体的自己価値や自尊感情が著

しく低下し (Jacobs, Lanza, Osgood, Eccles, & Wigfield, 2002<sup>1)</sup> など)、特に青年初期については、全体的自己価値が低いということが従来指摘されてきた (Harter, 1990<sup>2)</sup>; O'Malley and Bachman, 1983<sup>3)</sup>; Rosenberg, 1986<sup>4)</sup> など)。山本は日本の青年を対象とした全体的自己価値についての一連の研究の中で、青年初期に相当する中学生は、学年の上昇とともに全体的自己価値

が低くなり、次第に自分自身を否定的に評価するようになるということ、男子と比較して女子は特に自分自身に否定的であることを見出した(山本, 2013<sup>5)</sup>)。そして青年中期に相当する高校生に調査を行った研究では(山本, 2009<sup>6)</sup>)、高校生は非常に全体的自己価値が低く自分自身に否定的であり、青年後期に相当する大学生について調査を行った研究では(山本, 2010<sup>7)</sup>)、大学生も全体的自己価値は低く、いずれの時期も男子と比較して女子は自分自身に否定的であった。こうした一連の研究を通して、青年初期、中期、後期を比較してみると、日本の青年は、青年期の間中比較的全体的自己価値が低いということ、青年初期から青年中期にかけて特に低くなり、青年後期には少し肯定的になるということ、青年期の間、男子と比較して女子の全体的自己価値が低いことが示唆されている(Yamamoto, 2011<sup>8)</sup>)。

それでは成人期になると、全体的自己価値はどのようになっていくのであろうか。青年期と同様に自分自身に対して否定的に評価しているままで全体的自己価値は低いのであろうか。それとも青年期より肯定的になっていくのであろうか。青年期には男子と比較して女子は全体的自己価値が低かったが、成人期についても同様なのであろうか。日本で成人期を対象として全体的自己価値を検討した研究はあまりみられない。そこで本研究では、成人期に相当する中学生の親を対象に、自分自身について肯定的に評価しているのか、それとも否定的に評価しているのか、その様相を検討することを目的とする。

本研究では、自分自身についての評価を測定するために、「自分が好きである」、「自分自身に満足している」といった自分自身全体についての評価である全体的自己価値をとりあげる。また自己についての評価は、全体的な自己だけではなく、より具体的な側面の自己評価もある。Harter(1986)<sup>9)</sup>は、成人を対象として、全体的自己の他に、「社会性 Sociability」「仕事コンピテンス Job Competence」「養護性 Nurturance」「運動能力 Athletic Abilities」「身体的外見 Physical Appearance」「稼ぎ手としての十分さ Adequate Provider」「道徳性 Morality」「家事 Household Management」「親密な関係 Intimate Relationships」「知性 Intelligence」「ユーモア感覚 Sense of Humor」の11の具体的な側面の自己評価を捉えている。DuBois, Felner, Brand, Phillips, & Lease Provider(1996)<sup>10)</sup>は、5つの具体的な領域(仲間関係、学校、家族、身体的外見、スポーツ)の自己

評価をとりあげ、自己の評価をより詳細に検討している。本研究についても、これらの研究と同様に、自分自身全体についての評価である全体的自己価値とは別に、自分自身のより具体的な側面についての自己評価についても検討する。具体的な側面としては、「身体的外見」、「運動・健康」、「仕事」の3側面の自己評価をとりあげる。

こうした全体的自己価値と3つの具体的な側面の自己評価について、肯定的に評価しているのか、否定的に評価しているのか、父母で全体的自己価値や具体的な側面の自己評価に違いがみられるのか、全体的自己価値と具体的な側面の自己評価にはどのような関連がみられるのかを検討する。

## 【方法】

### 1. 調査実施手続きおよび調査協力者

調査は、2002年9月中旬から下旬に愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生とその親に対して行った。愛知県の中学生とその親4,483組(1年生1,448組, 2年生1,514組, 3年生1,521組)、福島県の中学生4,445組(1年生1,387組, 2年生1,522組, 3年生1,536組)であった。調査の依頼は学校を通して行い、中学生に自宅に持ち帰って父親及び母親に回答してもらおうよう依頼した。なお、調査は強制ではないこと、記入したくなければ記入しなくてもよいことを調査用紙に明記した。調査に回答し返送されたのは父親2,311名、母親2,492名であった。回収率は父親52.88%、母親56.56%であった(父親115名、母親79名は未実施のまま返却があったため、回収率の算出にはこれらを除いた)。回答者全員の平均年齢は、父親44.68歳、母親41.49歳であった。

### 2. 調査内容

#### ①全体的自己価値：

自分に満足しているか、自分が好きであるかなど自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定(非常にあてはまる, かなりあてはまる, ややあてはまる, ややあてはまらない, かなりあてはまらない, 非常にあてはまらない)で尋ねた。Harter(1986)<sup>9)</sup>の「Manual for the Adult Self-perception Profile」の中の全体的自己価値についての項目、DuBoisら(1996)<sup>10)</sup>のSelf-Esteem QuestionnaireとRosenberg(1965)<sup>11)</sup>の自尊感情尺度(日本語訳は山本・松井・山成, 1982<sup>12)</sup>を参考にした)を参考に作成した。山本(2009<sup>6)</sup>, 2010<sup>7)</sup>,

Table1 項目ごとの平均値及び標準偏差（父親）

	側面	項目	人数	平均値	SD
平均値が低い項目	仕事	私は、あまり仕事の成果があがらない。	1,930	2.87	(1.06)
	全体的自己価値	私は、時々自分がだめな人間だと思う。	1,926	3.08	(1.17)
	全体的自己価値	私は、時々自分のことがいやになる。	1,931	3.15	(1.16)
	身体的外見	私は、外見がもっと違ったらいいのになあと思う。	1,930	3.17	(1.34)
	運動・健康	私は、いろいろなスポーツがうまくでき、満足している。	1,937	3.33	(1.23)
	身体的外見	私は、自分の体重は今のままで十分だと思っている。	1,941	3.35	(1.45)
	身体的外見	私は、今の自分の見た目に満足している。	1,915	3.43	(1.06)
	身体的外見	私は、自分の顔が気に入っている。	1,917	3.46	(1.10)
平均値が高い項目	全体的自己価値	私は、今の自分自身に満足している。	1,915	3.52	(1.08)
	身体的外見	私は、自分の身長は今のままで十分だと思っている。	1,930	3.63	(1.40)
	全体的自己価値	私は、もっと自分に自信がもてたらいいなあと思う。	1,929	3.67	(1.23)
	運動・健康	私は、運動神経がいい方だと思う。	1,930	3.74	(1.25)
	仕事	私は、仕事では誰にも負けない自信がある。	1,922	3.80	(1.14)
	全体的自己価値	私は、今の自分が好きである。	1,927	3.81	(1.07)
	運動・健康	私は、体力に自信がある。	1,934	3.87	(1.12)
	運動・健康	私は、自分は健康だと思う。	1,922	3.89	(1.15)
	仕事	私は、今の自分の仕事に満足している。	1,930	3.93	(1.27)
	仕事	私は、自分の仕事に自信をもっている。	1,923	4.36	(1.08)

2013<sup>5)</sup>の青年に対する調査において使用した項目と同じものである。「今の自分が好きである」、「今の自分自身に満足している」、「時々自分がだめな人間だと思う」、「時々自分のことがいやになる」「私はもっと自分に自信がもてたらいいなあと思う」の5項目である。

②具体的な側面の自己評価：

「身体的外見」、「運動・健康」、「仕事」についてどのように評価しているのかを尋ねた(13項目)。項目は、Harter(1986)<sup>9)</sup>の「Manual for the Adult Self-perception Profile」の項目、DuBois(1996)<sup>10)</sup>のSelf-Esteem Questionnaire、山本(2009<sup>6)</sup>、2010<sup>7)</sup>、2013<sup>5)</sup>の青年に対する調査において使用した項目を参考に作成した。

「身体的外見」は、自分の外見に満足しているかどうか、好きであるかどうかについて6段階評定（非常にあてはまる、かなりあてはまる、ややあてはまる、ややあてはまらない、かなりあてはまらない、非常にあてはまらない）、5項目で尋ねた。項目例は「今の自分の見た目に満足している」「外見がもっと違ったらいいのになあと思う」である。

「運動・健康」は、自分のスポーツ能力をどのように評価しているかを6段階評定（非常にあてはまる、かなりあてはまる、ややあてはまる、ややあてはまらない、かなりあてはまらない、非常にあてはまらない）、4項目で尋ねた。項目例は「いろいろなスポーツがう

まくでき、満足している」「私は、運動神経がいい方だと思う」「私は、自分は健康だと思う」である。

「仕事」は、仕事能力をどのように評価しているかを6段階評定（非常にあてはまる、かなりあてはまる、ややあてはまる、ややあてはまらない、かなりあてはまらない、非常にあてはまらない）、4項目で尋ねた。項目例は「私は、今の自分の仕事に満足している」「私は、仕事では誰にも負けない自信がある」である。

【結果及び考察】

1. 項目ごとの平均値の検討

項目ごとに平均値、標準偏差を算出した(Table1, Table2)。父親で平均値が高かった項目は、「自分の仕事に自信を持っている」、「今の自分の仕事に満足している」など「仕事」に関する肯定的評価の項目であった。平均値が低かった項目は、「あまり仕事の成果があがらない」、「時々自分がだめな人間だと思う」など仕事や全体的自己価値の否定的評価の項目であった。

母親で平均値が高かった項目は、「もっと自分に自信がもてたらいいなあと思う」、「自分は健康的だと思う」といった項目であり、平均値が低かった項目は「いろいろなスポーツができ満足している」、「運動神経がよい方だと思う」など運動についての肯定的評価の項目であった。

Table2 項目ごとの平均値及び標準偏差（母親）

	側面	項目	人数	平均値	SD
平均値が低い項目	運動・健康	私は、いろいろなスポーツがうまくでき、満足している。	2,280	2.59	(1.23)
	運動・健康	私は、運動神経がいい方だと思う。	2,282	2.90	(1.36)
	身体的外見	私は、自分の体重は今のままで十分だと思っている。	2,295	2.95	(1.51)
	仕事	私は、あまり仕事の成果があがらない。	2,239	3.00	(0.99)
	身体的外見	私は、今の自分の見た目に満足している。	2,269	3.02	(1.10)
	身体的外見	私は、自分の顔が気に入っている。	2,270	3.13	(1.06)
	仕事	私は、仕事では誰にも負けない自信がある。	2,273	3.17	(1.11)
	全体的自己価値	私は、今の自分自身に満足している。	2,275	3.28	(1.13)
	運動・健康	私は、体力に自信がある。	2,287	3.47	(1.23)
平均値が高い項目	全体的自己価値	私は、時々自分がだめな人間だと思う。	2,287	3.50	(1.12)
	全体的自己価値	私は、時々自分のことがいやになる。	2,281	3.54	(1.13)
	全体的自己価値	私は、今の自分が好きである。	2,280	3.66	(1.12)
	身体的外見	私は、外見がもっと違ったらいいのになあとと思う。	2,284	3.72	(1.30)
	仕事	私は、自分の仕事に自信をもっている。	2,263	3.79	(1.22)
	仕事	私は、今の自分の仕事に満足している。	2,267	3.80	(1.29)
	身体的外見	私は、自分の身長は今のままで十分だと思っている。	2,283	3.83	(1.51)
	運動・健康	私は、自分は健康だと思う。	2,281	3.95	(1.21)
	全体的自己価値	私は、もっと自分に自信がもてたらいいなあとと思う。	2,293	4.16	(1.15)

Table3 父親の得点が高かった項目

		父親		母親		t値	有意差
		平均値	(SD)	平均値	SD		
全体的自己価値	今の自分が好きである。	3.81	(1.07)	3.66	(1.12)	9.82	父>母***
全体的自己価値	今の自分自身に満足している。	3.52	(1.08)	3.28	(1.13)	11.24	父>母***
身体的外見	自分の顔が気に入っている。	3.46	(1.10)	3.13	(1.06)	12.49	父>母***
身体的外見	自分の体重は今のままで十分だと思っている。	3.35	(1.45)	2.95	(1.51)	12.29	父>母***
身体的外見	今の自分の見た目に満足している。	3.43	(1.06)	3.02	(1.10)	13.46	父>母***
運動・健康	体力に自信がある。	3.87	(1.12)	3.47	(1.23)	13.50	父>母***
運動・健康	いろいろなスポーツがうまくでき、満足している。	3.33	(1.23)	2.59	(1.23)	17.37	父>母***
運動・健康	運動神経がいい方だと思う。	3.74	(1.25)	2.90	(1.36)	18.99	父>母***
仕事	仕事では誰にも負けない自信がある。	3.80	(1.14)	3.17	(1.11)	16.87	父>母***
仕事	今の自分の仕事に満足している。	3.93	(1.27)	3.80	(1.29)	8.56	父>母***
仕事	自分の仕事に自信をもっている。	4.36	(1.08)	3.79	(1.22)	15.73	父>母***

\*\*\*:  $p < .001$ 

## 2. 項目ごとの父親と母親の差の検討

父親と母親で自分自身の評価の仕方に違いがあるかを検討するためにt検定を行った。

「全体的自己価値」については、「今の自分が好きである」「今の自分自身に満足している」といった肯定的な項目で父親の得点が高く有意差がみられた。また具体的側面の自己評価については、「外見」、「運動」、「仕事」に関するすべての側面の肯定的項目で父親の得点が高かった。父親の得点が高かった具体的項目とt検定の結果はTable3に示した。逆に母親の得点が

高かった項目は、「自分の身長は今のままで十分だと思っている ( $p < .001$ )」、「あまり仕事の成果があがらない ( $p < .001$ )」、「自分は健康だと思う ( $p < .001$ )」の3項目のみであった。母親と比較して父親が自分自身をより肯定的に評価しているといえよう。

## 3. 具体的側面の自己評価の因子分析

具体的側面の自己評価に関する13項目について、事前に想定していた身体的外見（5項目）、運動・健康（4項目）、仕事（4項目）の3因子で妥当であるかど

Table4 具体的側面の自己評価の因子分析の結果（父親）

	因子負荷量		
	1	2	3
私は、自分の仕事に自信をもっている。	.94	-.01	-.10
私は、今の自分の仕事に満足している。	.61	-.04	.01
私は、仕事では誰にも負けない自信がある。	.55	.11	.01
私は、あまり仕事の成果があがらない。	-4.6	.05	-0.3
私は、いろいろなスポーツがうまくでき、満足している。	-.04	.85	-.01
私は、運動神経がいい方だと思う。	-.05	.85	-.09
私は、体力に自信がある。	.12	.47	.05
私は、自分は健康だと思う。	.04	.27	.26
私は、今の自分の見た目に満足している。	.08	.02	.65
私は、外見がもっと違ったらいいのになと思う。	.02	.10	-.54
私は、自分の身長は今のままで十分だと思っている。	-.06	-.05	.49
私は、自分の顔が気に入っている。	.14	.08	.39
私は、自分の体重は今のままで十分だと思っている。	-.07	.07	.38

Table5 具体的側面の自己評価の因子分析の結果（母親）

	因子負荷量		
	1	2	3
私は、運動神経がいい方だと思う。	.82	-.11	.03
私は、いろいろなスポーツがうまくでき、満足している。	.81	-.04	.05
私は、体力に自信がある。	.55	.16	-.10
私は、自分は健康だと思う。	.34	.21	.00
私は、自分の仕事に自信をもっている。	-.01	.88	-.02
私は、今の自分の仕事に満足している。	-.06	.69	.03
私は、仕事では誰にも負けない自信がある。	.18	.44	.02
私は、あまり仕事の成果があがらない。	-.02	-.39	-.03
私は、今の自分の見た目に満足している。	-.03	-.01	.91
私は、外見がもっと違ったらいいのになと思う。	.06	-.03	-.50
私は、自分の顔が気に入っている。	.07	.11	.47
私は、自分の体重は今のままで十分だと思っている。	.02	-.04	.45
私は、自分の身長は今のままで十分だと思っている。	.02	.01	.28

うかを確認するため、因子分析を行った。分析は父親、母親それぞれに行った（最小二乗法、プロマックス回転）。その結果、父親、母親ともに、固有値の減衰状況から3因子が妥当であると判断された。3因子での各因子負荷量を Table4, 5 に示した。

父親については、第1因子は事前に想定していた仕事についての自己評価を示す4項目からなり、「仕事因子」とした。第2因子は運動やスポーツについての自己評価についての3項目からなる。事前に想定していた「自分は健康だと思う」という項目については因子負荷量が低かったため「運動因子」とした。第3因子は、外見についての評価を示す5項目からなり、「外見因子」とした。

母親については、第1因子は運動やスポーツについ

ての自己評価についての3項目からなる。父親と同様「自分は健康だと思う」という項目については因子負荷量が低かったため「運動因子」とした。第2因子は仕事についての自己評価を示す4項目からなり、「仕事因子」とした。第3因子は外見についての評価を示す4項目からなり「外見因子」とした。事前に想定していた「自分の身長は今のままで十分だと思っている」については因子負荷量が低かった。父親、母親ともに、ほぼ事前に想定していた因子構造であった。しかし項目によっては因子負荷量が低いものもあったため、以下の分析に使用する側面ごとの合計点の算出には、因子負荷量の低かった項目は除いた。

Table6 全体的自己価値と具体的側面の自己評価の側面ごとの平均値, 標準偏差, t 検定の結果

	父親		母親		t値	有意差
	平均値	(SD)	平均値	(SD)		
全体的自己価値(5項目)	17.68	(2.72)	17.57	(2.87)	1.20	n.s.
外見(4項目)	14.07	(3.29)	12.37	(3.49)	16.06	父>母***
仕事(4項目)	16.22	(3.36)	14.77	(3.40)	13.58	父>母***
運動(3項目)	10.97	(2.95)	8.96	(3.14)	21.16	父>母***

\*\*\*:  $p < .001$

#### 4. 全体的自己価値と具体的側面の自己評価の平均値, 及び父母の差

全体的自己価値については, 肯定的に評価しているほど高得点になるように5項目を合計し尺度得点を算出した。具体的側面の自己評価については, 因子分析の結果, 父親, 母親の両方とも因子負荷量の高かった項目の得点を肯定的に評価しているほど高得点になるように合計し, 下位尺度得点を算出した (Table6)。

その結果, 父親は, 「全体的自己価値」, 及び「外見」「運動」「仕事」の3側面すべてに高い得点を示しており, 父親は自分自身を肯定的に評価していると考えられる。

また, 父親と母親で相違がみられるのかを検討するために, t 検定を行った。その結果, 「全体的自己価値」については, 男女間で有意差はみられなかった。具体的側面の自己評価については, 「外見」, 「運動」, 「仕事」すべての側面で父親の得点が高く有意差がみられた。

#### 5. 全体的自己価値と具体的側面の自己評価の関連の検討

全体的自己価値と具体的側面の自己評価がどのように関連しているのかを検討するために, まず相関係数を算出した (Table7)。その結果, 父親は「外見」と「仕事」の側面が, 「全体的自己価値」と相関がみられた。母親は, 「全体的自己価値」と有意な相関がみられたのは「外見」「運動」「仕事」の側面であった。しかし「運動」の側面については, 相関係数は非常に低かった。

次に, 全体的自己価値を従属変数とし, 外見, 運動, 仕事の自己評価を説明変数とする重回帰分析を行った。結果は Table8 に示した。

父親では, 「外見」の側面の自己評価が全体的自己価値に最も関連しており, 次いで「仕事」の自己評価が関連していた。しかし, 「運動」の側面については, 全体的自己価値と負の関連がみられた。

母親では, 「外見」の側面の自己評価が全体的自己価値に最も関連しており, 「仕事」の自己評価についても正の関連がみられた。しかし, 「運動」の側面については, 全体的自己価値に負の関連がみられた。これらの結果は, 父親とほぼ同様であった。

#### 6. まとめ

本研究の目的は, 中学生の親の全体的自己価値と具体的側面の自己評価の様相を検討することであった。

その結果, まず全体的自己価値については, 項目ごとにも, 項目の合計点をみても, 比較的得点が高く, 自分自身について満足しているなど肯定的に評価している。青年を対象として全体的自己価値を同一項目で測定している研究結果 (山本, 2009<sup>6)</sup>, 2010<sup>7)</sup>, 2013<sup>5)</sup>, Yamamoto, 2011<sup>8)</sup>) と比較してみると, 中学生の親の全体的自己価値は, 青年と比較して得点が高く, 年齢の上昇に伴って肯定的に自己を評価するようになる可能性が示唆される。これらをより詳細に検討するためには, 父親・母親それぞれに年齢ごとに比較し, どのような相違がみられるのかを検討する必要がある。

また父親と母親の差をみみると, 全体的自己価値と具体的側面の自己評価, いずれも父親よりも母親の得点が低く, 女性の方が自分自身に対して否定的であった。前述した山本の青年を対象とした研究でも (山本, 2009<sup>6)</sup>, 2010<sup>7)</sup>, 2013<sup>5)</sup>, Yamamoto, 2011<sup>8)</sup>), 青年期の間中, 男子よりも女子の方が否定的であるということが示されており, 青年期から成人期まで通して男性よりも女性の方が否定的であると考えられよう。

全体的自己価値と具体的側面の自己評価の関連については, 単純な相関では「外見」と「仕事」の側面の自己評価と正の関連がみられた。重回帰分析の結果では, 父母ともに, 「外見」の側面の自己評価が全体的自己価値に最も関連しており, 「仕事」の自己評価に

Table7 全体的自己価値と具体的側面の自己評価の相関

	全体的自己価値	外見	運動	仕事
全体的自己価値		.39***	-.03	.30***
外見	.42***		.29***	.33***
運動	-.08***	.27***		.37***
仕事	.27***	.33***	.31***	

\*\*\*:  $p < .001$

右上が父親, 左下が母親

Table8 重回帰分析の結果

	父親 $\beta$	母親 $\beta$
外見	.38 ***	.41 ***
仕事	.26 ***	.21 ***
運動	-.25 ***	-.26 ***
$R^2$	.23 ***	.25 ***

\*\*\*:  $p < .001$

$\beta$ : 標準偏回帰係数

についても正の関連がみられ、外見や仕事の面での自己評価が高いと、自分自身全体の評価が高くなるようである。しかし、「運動」の側面については、全体的自己価値に負の影響がみられ、「運動」面での自己評価が高い人ほど、全体的自己価値が否定的であるという結果であった。青年に対する調査（山本, 2009<sup>6)</sup>, 2010<sup>7)</sup>）では、高校生も大学生も、この側面は全体的自己価値と正の関連がみられている。なぜ中学生の親の年齢になると「運動」の側面と全体的自己価値が負の関連をみられるのかを、今後検討する必要がある。

【文献】

- 1) Jacobs, J., Lanza, S., Osgood, D., Eccles, J., & Wigfield, A. Changes in children's self-competence and values: Gender and domain differences across grades one through twelve. *Child Development*, 73, 509-527. (2002).
- 2) Harter, S. Identity and self development. In S. Feldman and G. Elliott (Eds.). *At the threshold: the developing adolescent*. Cambridge: Harvard University Press. Pp.352-387, (1990).
- 3) O'Malley, P.M. & Bachman, J.G. Self-esteem: Change and stability between ages 13 to 23, *Developmental Psychology*, 19, 257-268 (1983).
- 4) Rosenberg, M. Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls, & Greenwald, A. G. (Eds.), *Psychological perspective on the self*, vol3. (Pp.107-136). Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. (1986).
- 5) 山本ちか, 初期青年期の全体的自己価値および具体的側面の自己評価の発達の变化, *名古屋文理大学紀要*, 13, 1-10. (2013).
- 6) 山本ちか, 高校生の全体的自己価値の検討, *名古屋文理大学紀要*, 9, 29-36 (2009).
- 7) 山本ちか, 大学生の全体的自己価値の検討, *名古屋文理大学紀要*, 10, 15-22 (2010).
- 8) Yamamoto Chika, Development of global self-worth and domain-specific self-evaluations during adolescence in Japan. 17th European Conference on Developmental Psychology, (2011).
- 9) Harter, S. *Manual for the Adult Self-Perception Profile*. Unpublished manual, University of Denver, Denver, CO, (1986).
- 10) DuBois, D.L., Felner, R.D., Brand, S., Phillips, R. S.C., & Lease, A.M. Early adolescent self-esteem: A developmental-ecological framework and assessment strategy. *Journal of Research on Adolescence*, 6, 543-579 (1996).

- 11) Rosenberg, M. Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ; Princeton University Press, (1965).
- 12) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 認知された自己の諸側面の構造教育心理学研究, 30, 64-69 (1982).

#### 【付記】

本調査は、科研費・基盤研究 (B) (1)14310055 (研究代表者：氏家達夫，研究分担者：二宮克美，五十嵐敦，井上裕光) の補助をうけ実施された。本論文は、日本パーソナリティ心理学会第13回大会 (2004) において、発表した内容に、加筆・修正したものである。本調査の実施にあたり、調査にご回答いただいた中学生の皆さま、保護者の皆さま、並びに調査にご協力いただきました各中学校の先生方に心より感謝いたします。

また本調査の共同研究者であり、常日頃ご指導いただいている名古屋大学の氏家達夫先生、愛知学院大学の二宮克美先生、福島大学の五十嵐敦先生、千葉県立保健医療大学の井上裕光先生に厚く御礼申し上げます。